



# 全国大会出場 102回目のプロローグ

## 独占インタビュー

### 附属高校サッカー部 小嶺 忠敏 総監督

(兼大学サッカー部総監督)  
情報学部経営情報学科教授

附属高校サッカー部を今回「全国高校サッカー選手権大会」の舞台に導き、初出場ながらベスト16に進出した小嶺忠敏総監督に大会を振り返っての感想や類まれなる人材育成術について、独占インタビューを実施した。

今回の全国大会出場に際し、感動をあげた。今大会を振り返っての感想、また今回のベスト16という成績についてはどう評価されていますか

「もう1つぐらいは勝たせてやりたかった。」というのが正直な感想です。選手達に申し訳なかつたなど。少し手綱を緩めすぎたかなあと。

選手達は初出場で緊張していたので、最初はリラックスさせて選手達を力発揮できるように、普段の練習からリラックスモードを意識して環境作りを徹しましたが、2回勝利して特に2戦目で4対1の大差で勝利したこと、3回戦に臨むにあたり、ちよつとした気の緩みがあった。そこで手綱をビシッと締めるべきだったと反省しています。

本番前にどういうアドバイスをしたか、選手をリラックスさせたのですか

アドバイスというより、瞬間的なひらめきでやっています。あらゆる場面で常に選手達を観察し、リラックスや引き締めるためには何を話し、何をさせるべきかを、その場その場で判断して今重要なことは何かを自分の頭の中で最適な選択をします。前もって準備した考えもある程度はありますが、ほとんどが瞬間的な判断です。



大会では初戦の開始前笑顔で選手をリラックスさせる

切。私も日本一になるまで20年かかりました。決して特効薬を求めてはならない。仮に簡単に優勝できたとしても、その指導者は単発の優勝しか出来ない。複数回の優勝は出来ないのです。

総監督には、選手だけでなく、指導者の育成というのがひとつの大きな目的としてあると思いますか

本学附属高校の指導者のみならず、長崎県内はもとより、全国に行っても、熱心に訪ねて来られる他校の指導者もおられます。「これは、もしかしたら日本一になれる」という若手指導者もいます。

実は、選手権大会が終わってから、選手に現在の指導についてどう思っているかを聞いて、個々の指導力を高めて上げたいという思いも込めて、2、3年生の選手による指導者評価を抜き打ちで実施しました。評価結果を見て「選手達は指導者のことを本当によく見ている」と本当に感心しました。

私の各指導者への評価とよく共通しています(笑)。この結果を各指導者にフィードバックし、良い指導をしてもらえらることで、良い選手になれるというサイクルを、評価をする選手と、評価される指導者と、一緒に構築していきたいと考えています。

何の分野においても、良い指導者は、レベルに応じたわかりやすいこととばで、指導ができる。うわべだけ



全国大会のベンチでも若手スタッフ陣とともに戦術を確認する。

それはやはり経験に裏打ちされたものなのでしょうか

経験でしょうね。自分自身でやってきたもの。他の経験豊富な先生方のやり方はわかりませんが、指導者というのは、人のものまねでは駄目なものです。選手も個性が必要ならば、指導者も自分独自の個性が必要なのです。

指導者というのは、ついでに人のやり方を見よう見まねでやりがちですが、その指導者の持ち味を生かしつつ、人間性も加味したその指導者独自の方策や方式を作り出さなければいけません。



試合中、ベンチでひとり立ったまま、真剣な表情で戦況を見つめる

大会を通じて、選手達が確実に成長していると感じました。総監督の指導方針として、特に「個々のレベルに応じた指導」「長所を伸ばす、引き出す指導」が特徴だと思えますが、そうした人材育成術はどのような経験から導き出されたものなのでしょうか

20代から世界中を回り、FIFA国際連盟の指導者研修にも何カ月も参加し、世界のコーチングスクールなどにも通い、世界のサッカーをずっと見てきました。試合観戦に行った方はたくさんいるでしょうが、高校の指導者でそこまでやってきたというのは、他には負けないという自信があります。その中で、いろいろな方法を

の指導者に限って難しい横文字ばかり並べたりするので。指導者がそのレベルに上手く合わせた指導が出来るかが重要です。

総監督のモットーとして、「熱」「動」「生涯チャレンジ」ということを掲げられています。総監督をそこまで奮い立たせ情熱を燃やし続ける、源や根底となるものは何なのでしょう。また、今後の総監督の目標をお聞かせください

これまでの目標を振り返ってみると、①「世界に通用する日本を代表するリーガーを育てたい」。そして、②「日本一を目指すようなチームを作りたい」。日本一を経験することによって選手達は人生において自信につながります。もうひとつは、③「教えた生徒が指導者としてリードするような人材を育てたい」というこの3つが私の指導者としての目標です。私の場合、この目標があるので、生涯チャレンジで、後継者が出来るまではやりました。

そして、元気な限り、教育者としても生徒を育てるのが私の仕事です。この世に生まれてきた限り、そんな選手がそんな人間が一人でも育つていくと、というのとは、とても幸せだし、恩返しだと思つたのです。だから出来る限りのことはやりたい。いつまでやれるかわかりませんが全力投球で、生涯チャレンジでやっていきたいですね。

最後に、本学の学生や生徒に対して改めて伝えたいメッセージがあればお願いします

私は「生徒、学生の皆さんには、常にチャレンジしてほしい」と願っています。私が島原商業で日本一を目指すと言った

勉強しつつ、自分独自の方法を構築しました。だから、選手達も同じです。私がいづも使う言葉に「分析力」があります。その選手の長所は何なのか、短所は何なのか。人間、万能というのは絶対にないのです。いたらそれは神様ですよ。

今大会も、吉岡選手やゴールキーパーの田中選手など、小柄な選手が、チームの中心として活躍しましたね。



選手やチームの長所をとことん活かしてやらなければならぬという気持ちでやっています。ついつい指導者は選手の目先の失敗をとがめてしまう傾向があります。選手の個性を理解するために、選手と向き合いじっくり話すことが大事です。選手と私自身との出会いを大切に、選手にも出会いの大切さを話しています。常に選手達と心する覚悟でやっています。口先だけの指導者では駄目なのです。

私は選手にいつも「人生はリーグ戦だ」と言っています。トーナメントではない。若い時はいろいろある。家庭環境の問題もあるし、実際、私自身も母子家庭で生まれて昔はとにかしい加減な人間だった。しかし、中学高校大学の恩師と出会うと、人生が変わったのです。人生には立ち直るチャンスがあるのです。

それと同じで、サッカーも失敗がいっぱいあります。失敗したから次から試合に出さないでは、その選手は潰れてしまつ。何回失敗してもまたチャンスを与えて、高校3年間で急に伸びた選手もいるのです。どうしようもないと言われていた選手が伸びたケースもある。すぐ駄目だと見捨てずに、じっくりと見ていけば、やっぱりその選手には選手なりの持ち味があるのですよ。

時、周りから馬鹿みたいだと笑われました。当時は、九州のサッカーはまだまだ弱かった。人間というのは、どんな地方であろうとやる気になれば、やれるのです。私は人生で自分で身を持ってそれをやってきた。生涯はチャレンジの連続です。チャレンジ精神さえ持っていれば、人間も進歩しますし、チームも学校も、そして地域も活性化できます。

すでに新チームでの戦いがはじまっていますが、今後も更なるご活躍を期待しております。

名将小嶺忠敏総監督にとつて全国大会通算102回目の出場となった今大会。だが、それはあくまで「プロローグ」に過ぎない。その熱い眼差しが見つめる先に期待を抱くのは、私たちがではないはず。エピソードの気配すら感じない「生涯チャレンジ」の精神を目の当たりにし、その姿勢に改めて敬服するインタビューとなった。

(聞き手: 広報担当 田中、伊藤)

## 小嶺 忠敏

TADATOSHI KOMINE

島原商業、国見高校監督時代にサッカー部を17回日本一に導いた、高校サッカー界の名将。全国大会(高校総体・国体・高校選手権・全日本ユース)出場102回、優勝17回。元日本サッカー協会日本ユース代表(U-19)総監督・日本ユース代表(U-17)監督も経験。本学附属高校を本格的に指導して2年弱で、長崎県内の強豪校に育て上げ、今期、附属高校サッカー部を全国の舞台に三度(インターハイ、天皇杯、選手権)導いた。その人材育成術と手腕は、サッカー界のみならず各界から注目を集めている。

